代表者　加藤　良介　（二川中）　　授業者　松原　亜希子　（汐田小）

研究題目　地域のよさに気づき，人と人とのつながりの実現を求める子の育成

～　３年「おじいちゃん・おばあちゃんとわたし　みんなの願いをつないでいこう」の実践を通して　～

１　主題設定の理由

⑴　現代社会に生きる子どもたち

戦後の急速な科学技術の発展により，人々の生活は大きく変化した。ボタン一つで家事が行われる電化製品が普及し，便利で快適な生活が実現されてきた。しかし，ネット社会に象徴されるように直接的なかかわりが少なくなった現代社会では，人間関係の希薄化も指摘されるようになった。また，子どもたちが社会性の基礎を養う場であるはずの家庭も，核家族の増加や少子化の影響で以前に比べその機能が低下しているとの声もあり，コミュニケーション能力の育成や地域の絆の再構築が大きな課題となっている。

一方で，近年の環境問題への国際的な取り組みや，東日本大震災による原子力発電所の事故をきっかけにしたエネルギー転換の議論のように，いわゆる「持続可能な社会」の実現が求められるようになった。大量生産，大量消費，大量廃棄という構造から３Ｒ（リサイクル・リユース・リデュース）への変化といった構造的な産業革新だけでなく，昔からものを大事に使ってきた日本古来の生活様式を見つめ直す動きも強い。

豊橋市社会科研究部では，子どもたちが価値観の変化に対応し現代社会の中で自己を確立していく態度の育成を目ざし，研究を重ねてきた。昨年度は，豊橋に来ている留学生を教材化し，国と国とのかかわりを深めるよさを考えることができた。その成果をふまえ，よりよい未来を実現する上で，人種や性別，世代を超えて心を通わせ合う，人と人とのつながりが必要不可欠であると考え，本研究に取り組んだ。

⑵　昔の道具を通して感じる人々の知恵や地域社会の絆

汐田校区には，老人会をはじめとする子どもたちを見守るあたたかな人間関係がある。しかし，本学級の子どもたちは３８人中３人しか祖父母と同居していないためか，地域のお年寄りに対してあいさつをする程度で積極的にかかわっていない。事前のアンケートでは，自分の祖父母に対して「祖父母と話すことは楽しい」「～を買ってくれる」「～へ連れて行ってくれる」という理由で多くの子が好意を抱いているものの，その理由は表面的であり，祖父母との深いかかわりが感じられなかったため，さらにかかわりを深めてほしいと考えた。

本単元で取り上げる子どもたちの祖父母が子どものころに使っていた「昔の道具」は，一見単純で不便なものに感じることが予想される。しかし，お年寄りと共に体験を行い当時の生活の様子をていねいに聞き取ることで，今まで知らなかった昔の人のもつ知恵や技のすばらしさに気づくとともに，不便だからこそ支え合って生きていた地域の人間関係の豊かさを感じるであろう。また，当時の人々の願いを探ることで，物質的に豊かになった現代に生きる自分たちの生活を見つめ直すことが期待できる。さらに，願いを実現しようとする先人の強い思いや懸命な努力によって，現代の快適な生活があることを認識させることで，お年寄りに対する感謝の気持ちや，より身近な存在として世代を超えてともに地域の絆を深めていこうとする思いや態度を育てていきたいと考えた。

２　研究の内容

⑴　研究の仮説

Aお年寄りに寄り添いながら昔の道具やくらしを追究すれば，お年寄りをより身近な存在としてとらえ，当時の人々の知恵や支えあう社会のよさを感じとることができるであろう。

また，B当時の人々の願いとともに生活の変化をとらえ，C人とのつながりという視点で生活を見つめ直すことで，地域のよさを再発見するとともに，人と人のつながりを大切にしながらよりよい地域を築いていこうとする子が育つであろう。

⑵　研究の手立て

Ａ　昔の道具のよさを探りお年寄りの思いにふれる（心情の育成）

ⅰ　昔の道具の特徴を体感するための，こども未来館の見学や道具を使う体験活動

ⅱ　昔の人の知恵や技に気づくための，地域のお年寄りからの聞き取り活動

Ｂ　人々の願いとともに生活の変化をとらえる（認識の育成）

ⅰ　当時の思いや願いを調べるための，体験活動や聞き取り活動

ⅱ　時代の特徴をとらえるための，話し合い活動

Ｃ　人のつながりという視点で生活を見つめ直す（働きかける力の育成）

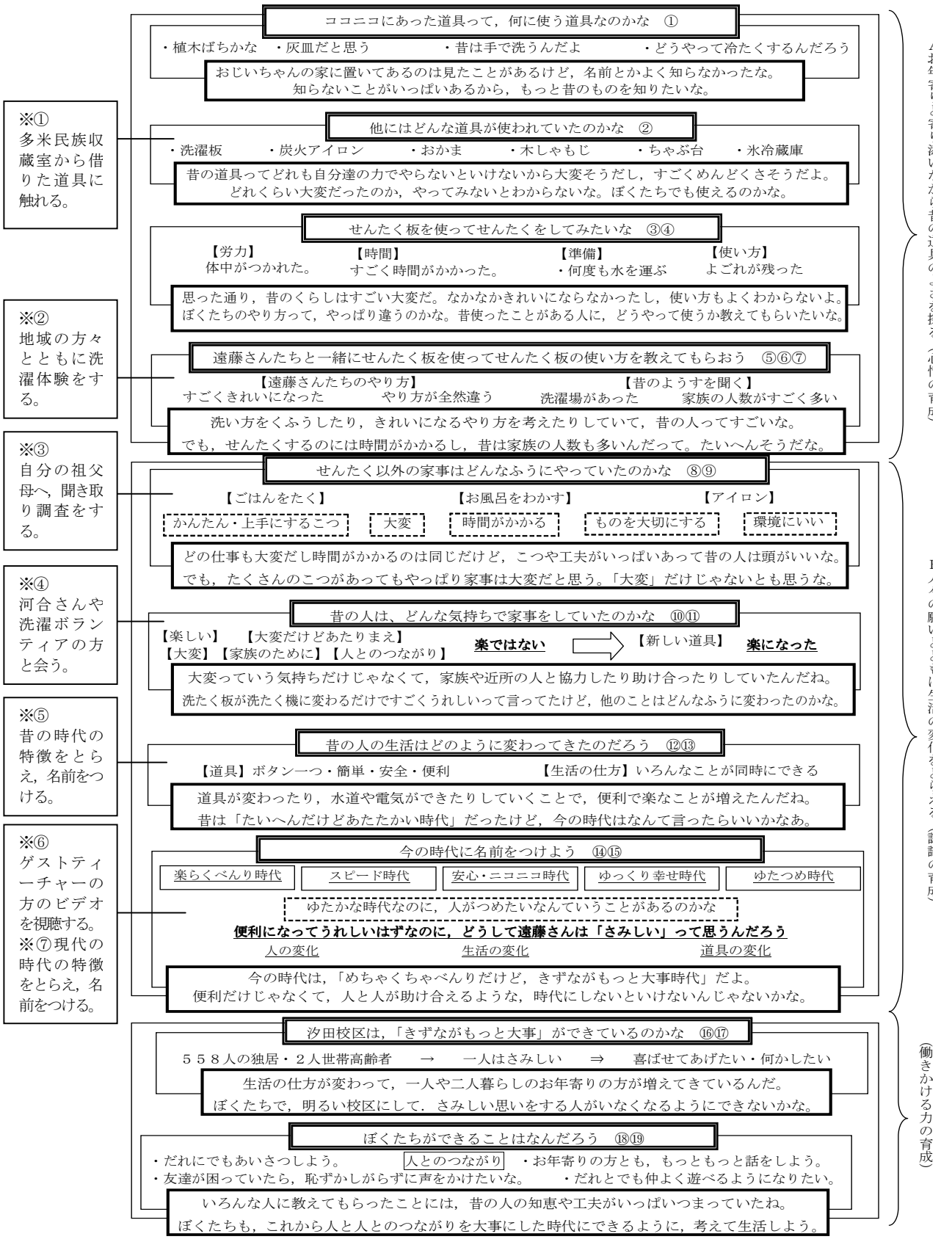
ⅰ　地域のつながりを意識させる資料の提示

ⅱ　人と人とのつながりの実現について考えるための場と時間の設定

⑶ 抽出児の設定

A児	B児
祖父母は蒲郡市に住むが，「遠い」と感じており，遊びに行くことも電話で話すことも少ない。そのため，祖父母に対しての関心が薄いと考えられる。 授業では，自分なりの考えをもち発言できるが，多様な意見を受け入れにくい。本単元では，共通の体験や調査をすることで，認識が広まることを期待したい。	福祉施設へのボランティア活動の経験があり，自分の祖父母だけでなく高齢者の方への関心は高い。 自分の目で見たり話を聞いたりする社会科の学習を通し，自分の考えや思いをもつことができるようになってきている。本単元では，さらに積極的に働きかけようとする思いの高まりを期待したい。

⑷ 単元構想　（全１９時間）



３　実践と考察

⑴ 昔の道具のよさを探りお年寄りの思いにふれる（心情の育成）

①　昔の道具ってどんなものだろう　―「こども未来館ココニコ」の見学

事前のアンケートから核家族で生活する子どもが多いことがわかり，実際に昔の道具を見ることが必要だと考え，さまざまな時代の道具がそろっている「こども未来館ココニコ」を見学することにした。

氷冷蔵庫を金庫だと勘違いしたり，洗濯板を使う絵を見て「こんなふうにしたら服がびりびりになっちゃうじゃん」と話したりする子が見られた。ふだん家で使っている電化製品や家具の様子とずいぶん違うことに，どの子も驚いたり疑問をもったりしながらとても興味深く見学をしていた。そこで，昔の道具に興味をもちはじめた子どもたちが，さらにじっくり昔の道具に触れることで，当時の生活の様子や道具に隠された使い手の知恵や技に気づいてほしいと願い，多米民族収蔵室から道具を貸していただき校内に展示することにした。

数日間，自由に観察させた後，「こども未来館ココニコ」や校内に展示した道具を見て感じたことを交流する場を設けた。氷冷蔵庫のことが話題となると「こんなにせまくちゃ全然ものが入らん」「氷を毎日変えるなんてめんどくさい」「使っていた昔の人はかわいそう」（B児）といった意見が続き，多くの子が現代の機械と比較しながら昔の道具の不便さをとらえた考えを発表した。一方で，「昔の人は苦労してもがんばっていたから，がんばりやさんだと思う」「使い方が難しいのに，使いこなせていてすごい」と，道具を使う様子を想像しながら当時の人を肯定的にとらえた発言もあった。しかし，子どもたちの発言はあくまで想像であったため，実感のある話し合いとはならなかった。そこで，昔の道具を使った経験を尋ねると，経験はないが多くの子が洗濯板を例に挙げて，こする・もむ・たたく等，テレビや昔話等で見た使い方を紹介し合った。そして，「どれくらい大変か，自分で使ってみたい」という声があがった。 そこで，子どもたちの思いを大切にした学習を展開するために洗濯板体験をすることにした。

資料1　授業記録　洗濯体験後の感想交流

（略）

C21（A児）　ぼくも，（C18）さんと同じで，洗濯板を使ってやると，手がしわしわになって腕が疲れました。なので，ぼくのやり方は，ちがったかもしれないけど，汚れは少しとれていたので，少し合っていたかもしれないです。

T　汚れがとれたけど，でも少しだから違っているかもしれないっていうことかな。

C21（A児）そう。

C22　ぼくも同じで，がんばってやったのに，汚れが少し残った。やり方が分からない。

T　みんなうまくできなかったの？

C23　わかった。みんなが子供だからじゃない？

T　子供だとどうしてできないの？

C24　力がないからだと思う。

T　そうかあ。

C25　じゃあ，ぼくたちにはできんってことじゃん。

T　できないままでいいの？

C26　それはいやだけど。

C27　誰かに教えてもらえばいいんじゃないのかな。

T　誰に？

C28　洗濯板を使ったことがある人に。

（略）

②　昔の人は不便だと感じなかったのかな　―洗濯板体験

洗濯板を使った洗濯は，洗濯機より長時間の手作業が必要である。子どもたちにとって身近な作業である洗濯を取り上げれば，現代の機械と比べながら労力や作業の時間を実感しやすいと考えた。

初めての体験にどの子も困惑しつつも，テレビ等で得た知識をもとに試行錯誤をしながら楽しそうに活動していた。しかし，洗い終わった感想は「きれいになった」７人，「汚れが残った」31 人と，満足できる結果にはならなかった。

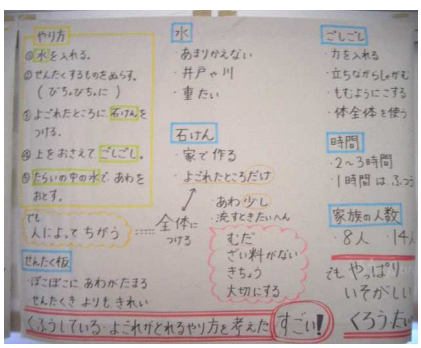
体験をした感想を交流すると，多くの子が昔の道具を使いこなす大変さを発表した。そうした中で，「手がしわしわになって腕が疲れました。なので，ぼくのやり方はちがったかもしれない」というA児の発言をきっかけに，自分たちは正しく使っていないのではないか，わかる人に聞いてみたいという思いが高まり（資料１），「どうしたらきれいになるんだろう」という課題のもと，ゲストティーチャーを招き，再度洗濯板体験をすることにした。

③　おじいちゃん，おばあちゃんはすごい　―地域のお年寄りからの聞き取り活動

昔のことを知っていそうな人は誰かと子どもたちに尋ねると，以前校区探検でお世話になった遠藤さんや校区老人会の方を挙げた。

子どもたちは，石けんの使い方や洗濯物の持ち方等，一つ一つの説明を聞き落とさないよう真剣に聞き，力の入れ具合や足の開き方等，作業方法を手や足を一緒に動かしてもらいながらていねいに教えていただいた。工程をよく観察していたB児は，泡の処理を「手であわをとって手でしぼる」ことを見つけ，「あわも水も外に出さないし，速くやってすごい」と，手際のよさに驚き洗濯を手作業でやる人の姿やその工夫に目を向け始めた。自分のやり方に半信半疑だったA児は，教えてもらったやり方で「すごくきれいになった」と，昔の洗い方に納得していた。

資料2　話し合いの様子をまとめた学級掲示



体験後，わかったことを発表し合うと，時間がかかること，重たくて手や腰が痛いこと等の大変さを再確認しただけでなく，家族の人数が多くてみんなで協力して作業したことや一緒にやって見つけたさまざまな工夫についてたくさん発表した（資料２）。また，石けんや水を大事に使っていたことに気づいた子の発言をきっかけに，「昔の人は子どもも家の仕事をしていて，それが当たり前だなんてえらい」「板のぎざぎざの向きや形にもちゃんと意味があるのを知って，簡単な道具に見えたけど昔の人は賢いんだなって思った」「おばあちゃんたちの方が力がないと思ってたけどすごく上手にやっていて，ぼくより早くきれいになってた」といった意見が続いた。昔の人の考え方，道具に隠された知恵，作業の手際のよさなどに直接ふれたことで，当時の道具を使う人に子どもたちが心情的に寄り添い肯定的にとらえ始めたことが伝わってきた。

⑵　人々の願いとともに生活の変化をとらえる（認識の育成）

①　どんな気持ちで家事をしていたのだろう　―当時の思いや願いを調べるための体験活動や聞き取り活動

体験を終えて多くの子が満足していたが，昔の道具は洗濯板だけではないため，知恵や工夫を理解したといっても十分ではない。多くの道具について聞き取り調査をすることで，昔の道具やその使い方に込められたよさをたしかなものとして認識し，お年寄りの思いにさらに深く寄り添うことができると考えた。そこで，他の道具や人々のくらしぶりについてもっと調べてみたいという子どもの声を生かし，自分の祖父母に直接会いに行ったり電話を何度もして話を聞いたりして，引き続き道具調べを行った。

体験後に自分たちで追加して調べた内容を交流し合うと，やはり現代の生活と比べて家事に時間がかかったり重労働だったりして大変だったことや，どの作業にもさまざまなこつがあったことを口々に発表した。すると，Ｂ児が「洗濯も大変だったけど，だんだんこつがわかって自分できれいにしたのがうれしかったし，洗濯のときにきてくれたおばあちゃんもわたしのおばあちゃんも，今と違って一人じゃできないことがたくさんあったって言ってた。だから，大変な気持ちだけじゃなくて，みんなでやるし今より楽しいこともあったんじゃないかな」と発言した。Ｂ児のこの発言から，道具を介して人と人がつながる姿について追究を始めることができると考え，「どんな気持ちで家事をしていたのだろう」と当時の人々の気持ちに焦点を当てて調べ直すことになった。

ア　河合さんの話

心情面でも祖父母を対象に聞き取りを行ったが，中には自分の祖父母と直接連絡が取れない事情の子や祖父母が若くて十分調べることができない子もいた。すると，数名の子が「洗濯のときに教えてもらった人に，また会いたい」と考え始めるようになり，再度地域のお年寄りの方と直接かかわる機会を設けた。

校区の楽法寺には井戸が残っていると，洗濯体験のときに教えてもらった子がいた。そこで，井戸を見学した後に，住職の奥様である河合さんに昔の道具をどんな気持ちで使って生活していたか当時のくらしぶりについて話していただいた。河合さんは家事の大変さだけでなく，共同風呂で背中を流し合ったこと，テレビは人の家で見せてもらっていたことなどを，よい思い出として懐かしむように語ってくださった。「昔の人は助け合ってくらしていた。大変だったって言っていたけど，みんなでお風呂に入ったり一緒にテレビを見たりするのも楽しそう。わたしもやってみたい。」というＢ児の見学後の感想からは，生活の中で自然に人と人とがかかわり合っていた話を聞いたことで，人と人とのつながりに当時の生活のあたたかさを感じている様子を読み取ることができた。一方，Ａ児は共同風呂へ行くことを「めんどくさかったと思う」，人の家でテレビを見ることは「よっぽどお金がなくて困っているのかな」と書いていた。一見，人と人とのかかわりのよさに十分気づいていないのではとも考えられるが，Ａ児の視点は当時の人々のより豊かにくらしたいという願いに結びつけることができると考え，さらに聞き取りの機会を設けて素直な気持ちをお年寄りに聞いてみることを助言した。

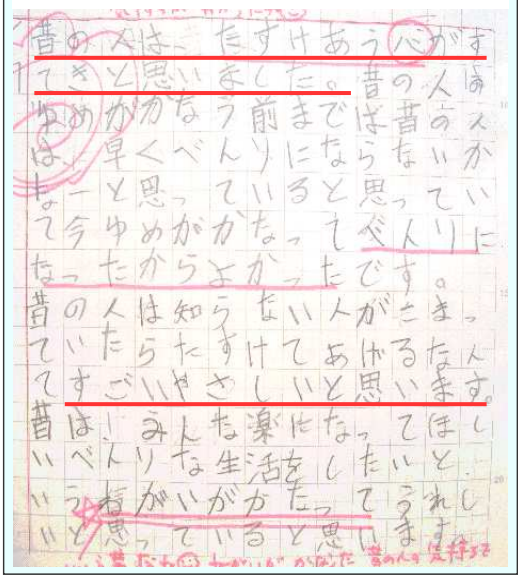
イ　洗濯ボランティアの方との再会

写真1　「本にのってるこれって，何に使うの？」

洗濯体験で来ていただいたお年寄りと再会すると，どの子も聞きたかったことを意欲的に質問し，追究意欲の高まりとともにお年寄りとの心的な距離が縮まっていることを強く感じた。

交流後の話し合いでは，ものを貸し合ったり，家族や近所の人で支え合ったりして生活していた昔の人々の姿がより具体的になった。また，お年寄りの方々が現代の生活スタイルについて「便利になってうれしい」と話していたことに話題が広がると，助け合って生活するよさを感じながらも，家事や生活の仕方が少しでも楽になってほしいと願っていたことに多くの子が気づいていった。

資料3　生活の変化を学習したあとのＡ児の感想



Ａ児も，お年寄りの方と交流を深めたことで助け合う人々を「すごいやさしい」と表現し，昔の人の思いに寄り添いはじめた。そして，「べんりになったからよかった」「ねがいがかなって」ということばからは，人と人とのかかわりのよさに気づきにくかったＡ児が，洗濯ボランティアの方の思いや願いについてじっくり聞き取る機会を設定したことで，昔の生活や自然に手を差し伸べ合う人々の姿を肯定的にとらえ直し，昔の道具を使う時代への認識が大きく変わっていったことが読み取れた（資料３）。

②　今の時代に名前をつけよう　―時代の特徴をとらえるための話し合い活動

昔の道具を通して，当時のくらしぶりや願いをとらえ，また，不便だからこそ人が助け合っていたとさまざまな視点で時代をとらえ始めた子どもたちに対して，昔と現代を比べながら時代に名前をつけることでそれぞれの時代の特徴をより明確にするとともに，自分たちの生きる現代を見つめ直すきっかけとなると考えた。

そこで，これまでの学習をもとに学級全体で昔の時代についてまとめると「たいへんだけどあたたかい時代」となり，今の時代の名前は何になるかを話し合った。

話し合いの前半は，簡単・便利・時間がかからない等，昔の人々の願いが実現したことをとらえた発言が続き，人の気持ちを考慮したB児たちを指名すると，今は「めちゃくちゃ便利でうれしいニコニコるんるん時代」と発言し，他の子も同意を示したことで現代のとらえがまとまった。しかし，現代社会の人と人とのかかわりについて十分とらえた発言がなかった。そこで，「便利でうれしい反面さみしい」と語ったゲストティーチャーのインタビューを視聴させ，ゆさぶりをかけた。

すると，現代を豊かだが人間関係が冷たいと感じたことを理由に「ゆたつめ時代」と名づけた子が，自分の考えを説明し，後半は人と人のつながりから現代を見つめ直すことができた。B児はこの考えに賛同し，「昔の人はやさしくて，協力してて，あたたかい人だった。でも，今の人はあんまり協力したりしないからつめたい」と発言した。このB児のように，多くの子どもたちは「人がつめたくなった」と，「さみしさ」の理由を人そのものがつめたくなってしまったと考えていた。

しかし，ゲストティーチャーが感じるさみしさの理由は，人の変化によるものではなく，人と人が直接かかわる必要がなくなった社会の変化からくるものである。そのことを正確に認識させたいと考え，科学技術の発展により家事や生活スタイルが変化したことと，それにともない人と人とのかかわり方も変化してきたことを比較しながら，再度話し合いの場を設けた。

昔と現代の違いを意識して話し合い，子どもの発言や考えを板書で整理していくと，道具の変化や家事にかける時間，家族構成などさまざまなことが変化していったことをとらえることができた。また，C47の発言を受け「あいさつしないからさみしいの？」と切り返すと，C49の「助け合い」という発言をきっかけに，人と人とのつながりに目を向けていった。そして，昔にあった人と人とのつながりが現代にはなくなってしまったことに気づくことができた。（資料４）。

さらに，子どもたちは自分たちで考えた「うれしいニコニコるんるん時代」を見つめ直し，昔と比べ人と人との直接的なかかわりが減ってしまったことを理由に，「めちゃくちゃべんりだけど，きずながもっと大事時代」と考えをまとめ直すことができた。

資料4　授業記録「遠藤さんはどうしてさみしいのだろう」

（略）
C42　家族の人数が変わった。昔ほど今は多くない。
C43　ものが新しくなった。それでゆたかになった。
T　他に何が変わった？
C44　ボタン一つでできること。天国，パラダイスみたい。
C45　（A児）ものがいろいろ使いやすくなった。
C46　つけたしで，使いやすくなって楽になった。
C47　遠藤さんもそれはいいって言ったけど，あいさつしないからさみしいと言ったと思う。
T　あいさつしないからさみしいの？
C48　そう・・・じゃないかなあ。
C49　そうじゃなくて，人と人が昔は助け合っていたと思う。
C50　（B児）ものとかをかしあって仲良くしてた。
C51　笑える話をしてたから，きずながあったと思う。
C52　人と人の助け合いがあった。
C53　友情じゃないかな。
C54　人と人のなかよしさ。
（略）
C59　人と人が大事にしてる。
T　人と人が？
C60　（B児）人のつながりがあると思う。
C61　人と人が仲間みたいな感じ。
T　つながりがあるから仲間になるし，助け合うし，信じあえるんだね。昔の人には今の人とはちがうつながりがある。
C62　大切な人っていうことみたい。
（略）

ゲストティーチャーの感じるさみしさの理由を，昔と現代の生活の仕方と比較して整理して探ったり，子どもの発言をもとに切り返しをしたりすることで，人と人とがつながり合う姿の尊さをはっきりと認識することができたと考えられる。

⑶　人のつながりという視点で生活を見つめ直す（働きかける力の育成）

①　汐田校区にはどれぐらいのお年寄りがいて，どんな気持ちで生活しているのだろう
―地域のつながりを意識させる資料の提示

人とのかかわり方に対しての意識が高まった子どもたちは，「きずながもっと大事」な時代を何とかしようと考え始めた。そこで，さらに地域の一員としての自覚をもたせ世代を超えた豊かな人間関係に目を向けさせたいと考え，「汐田校区にはどれぐらいのお年寄りがいるか」と問いかけた。そして，多いか少ないかも明確でない様子の子どもたちに，市内に住む65歳以上の高齢者の世帯人数と独居や２人世帯の数が校区ごとにまとまった資料を提示した。すると，資料を比較することで，汐田校区は，他校区よりも独居・２人世帯の高齢者の割合が少ないことがわかった。A児は独居・２人世帯の高齢者数が予想よりも少なかったことに安堵し，独居老人が「０人のほうがもっといい」とつぶやき，地域のお年寄りを身近に感じ心配していることがうかがえた。

さらに，全体で意見を交流すると，「二人でも一人でもさみしい。話が盛り上がらないし，朝からずっと二人はさみしい」（B児），「お年寄りの人を大事にしたい」「もっと親切にしたいな。おばあちゃんたちに」というように，自分たちにできることを一生懸命に考える姿からは，地域の一員として豊かなかかわり方を模索するたくましささえ感じた。

②　わたしたちにできることは何だろう
―人と人とのつながりの実現について考えるための場と時間の設定

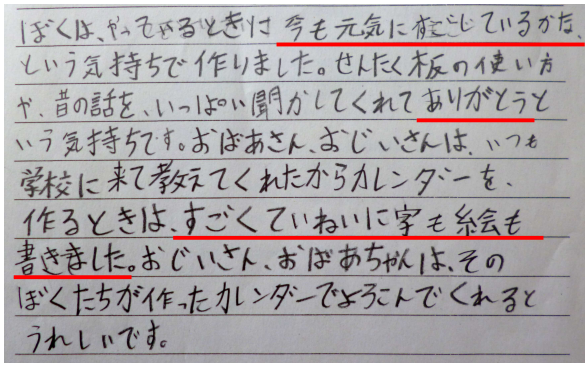
自分たちにできることについて，「あいさつはもちろん，荷物をもってあげる」，「友だちのように常に声をかける」等さまざまな意見が出された。さらに，「もっとすぐにできることをして，お世話になったお年寄りにお礼がしたい」という発言を

写真2　「よろこんでくれるといいな。」

きっかけに，「じゃあ，汐田校区がありがとうがいっぱいの場所になるように，みんなでプレゼントを作って喜んでもらえばいいと思う。」とＢ児が提案をし，グループごとにお世話になった方々にカレンダーを作成して送ることになった。この発言からは，Ｂ児が地域に対する願いをもち，積極的に働きかけようとしていく姿を感じ取ることができた。Ｂ児の提案をうけ，折り紙で飾りつけたり，昭和に関係する絵を描いたりする等，相手に喜んでもらうための工夫を，どの班も取り入れた（写真２）。

Ａ児は，資料５からもわかるように，相手を労わる気持ちや感謝の思いを抱きながらカレンダーをていねいに作成することができた（資料５）。

資料5　カレンダー作成後のA児の感想



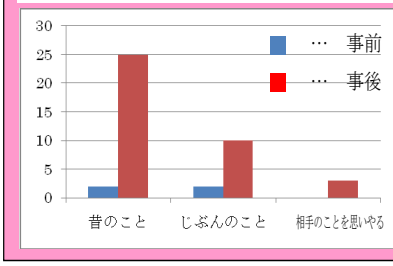
４　研究のまとめ

⑴　研究の成果

Ａ　昔の道具のよさを探りお年寄りの思いにふれる（心情の育成）

「使っていた昔の人はかわいそう」というＢ児のことばに表されるように，昔の道具に不便さを強く感じていた子どもたちであったが，さまざまな道具を借り実際に触れることで，道具のつくりにこめられた工夫や，知恵を生かしながら生活するお年寄りに，寄り添う気持ちを育むことができた。

資料6　単元後アンケート「どんな会話をしますか」



また，洗濯板の使い方を教えてもらった体験から，昔の道具に隠された工夫だけでなく当時の人の知恵や考え方を学んだＡ児は，単元の終末には地域に住む独居・２人世帯のお年寄りについて心配したり，お世話になった方たちのことを「今も元気にすごしているかな」と話したりする等，以前よりもお年寄りを身近な存在としてとらえていることが感じられた。

お年寄りに寄り添い，その知恵やものの考え方を学びながら道具のよさを探る活動は，世代を超えた地域の方との心の交流も行うことができた。また，自分の祖父母と昔の道具や遊び，戦争のことを話すようになり，学習を通して子どもたちがお年寄りと深くかかわりあうことができるようになったことがわかる（資料６）。

Ｂ　人々の願いとともに生活の変化をとらえる（認識の育成）

地域の人とかかわりながら，当時の人々の思いに焦点をあてて追究することで，Ａ児は「べんりになってよかった」や「ねがいがかなって」とあるように，人々の願いが現代の生活とつながっていることに気づくことができた。また，Ｂ児は「昔の人は助け合ってくらしていた。大変だったって言っていたけど，みんなでお風呂に入ったり一緒にテレビを見たりするのも楽しそう。わたしもやってみたい。」というように，人と人とのつながりのよさに気づくことができた。このように，地域の人とかかわりながら学習を進めることは，子どもたちが時代の特徴を認識し，人々の願いと生活を結びつけてとらえることに大変効果的であった。

昔と現代を比較して名前をつける活動では，子どもたち一人ひとりが昔から現代への変化をとらえ，名前をつけることができた。これらを話し合うことによって，「きずながもっと大事時代」と考え直したように，生活の便利さという現代のよさだけでなく，人と人とのかかわり方の変化にも目を向けることができた。

人々の願いとともに生活の変化から時代の特徴をとらえることは，現代に生きる自分たちの生活を人と人とのつながりを意識しながら見つめ直すきっかけとなった。

Ｃ　人のつながりという視点で生活を見つめ直す（働きかける力の育成）

地域に住むお年寄りの世帯構成を提示して，自分たちが接したお年寄りだけでなく地域全体を意識させたことは，地域のために自分たちにできることをしたいという思いの原動力となった。また，「汐田校区がありがとうがいっぱいの場所になるように」というＢ児の発言からもわかるように，自分たちが考えた方法を具体的に取り組む活動の場を設定したことで，地域の一員としての意識を高め，願いをもって働きかけるようとする思いの高まりへとつながった。

⑵　今後の課題

本単元は，社会科の授業として子どもたちが歴史事象と出会う初めての単元である。本単元以降の学習の深まりを求めるためにも，社会事象に対する認識をさまざまな視点から考えることや，自分自身がよりよい社会を築いていく一員であるという意識が育まれるような学習活動を取り入れていくことが，必要であると考える。